
幸せ

悠輝

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ

【Nコード】

N4372B

【作者名】

悠輝

【あらすじ】

この小説は悠輝の人生の実話です。馬鹿な女と笑いながら読んでください。

ブローグ

高校2年の頃

まだ子供だった私は妊娠し中絶した。

どうしようもない男に惚れて本当に今思えば馬鹿だった。

けれど

その経験がなければ今の私はなかったと思う。

第1話 再会

私の名前は悠輝。

如月 悠輝。

高校2年だが全日制の高校をやめ
今は通信制の高校にいつている。

今日は体育とかで近くの市民体育館に呼ばれた。

だるい。

本気でだるい。

実際卓球とか将来何の役にたつの？

「じゃあ2人1組になってくださあい！」

まあ卓球は一人じゃできないしね。

ツツて通信制に友達いねーよ！

いるわけないだろ！？

……いぢめか！？

「如月さん？」

斜め前に座っている子が振り向いてそう言った。

………はい？

「やっぱり如月さんだ！ほら前の高校の吹奏楽部で会ったちゃん！」

…うん。

まず名乗ろうよ。

吹奏楽部でたの１回だけだね。

「ほら！トイレで泣いてた私を気にしてくれてたじゃん！」

………え？

「あ……！！！！！！！！」

名前

なんだっけ？

「思い出してくれた！？」

すごい笑顔で私を見る。

軽く罪悪感。

「うん……。」

顔だけね。とは言えない。

「よかったアア！一緒にするなら知り合いがよかったからさアア」
人懐っこい子だな。

二人で1番隅の卓球台に移動する。

「本当よかったアア。知ってる子がいて……ずっと如月さんぢやないかな？と思つてたんだアア」

カコンカコンとラリーを続けながら話す。

それにしてもよくしゃべる子だ。

他愛ない話をしながらラリーを続ける。

「如月さん彼氏いるの？」

「いないよ。」

「紹介してもいい？彼女いない子いてさ……」
「うん」

あんまり乗り気はしなかった。

でも彼氏がないのもいい加減さみしい。

番号とアドレスを交換してその日は別れた。

不思議な子だ。

でもいい子だな。うん。

―数日後―

「悠輝――！！！」

「ゆり！！！！」

あれからメールや電話で連絡を取り合い
名前で呼び合うまでにはなった。

今日は彼氏の友達とやらを紹介してもらった日だ。

「こないだの卓球つまんなかったね。」

「そうやね。」

「でもあれなかったら悠輝と会ってなかったよね。」

「たしかに。」

あれこれ話してる間についたみたいで
アパートらしき建物に入った。

2階の205号室

ガチャ！

え！？

いきなり入っちゃうの！？

プライバシー無視！？

玄関を入るとすぐ台所。

台所の机に一人のおばさん。

か…れし…のわけないか。

母だな。

「あら。ゆりちゃん」

そしてチラッとこつちを見る。

「ゆりちゃんの友達？」

「そうだよ！」

それにしてもすごい。

何がつてすべてが。

例えるなら

できそこないのおつとせい。

彼氏ってどんな人なんだろう。

がらっ！

奥のふすまが開いた。

「ゆり！母さんはいーからこつち！」

……………んんゝ！？

すっげーイケメン！

ジャニーズ系だな。

おつとせいからジャニーズ。

遺伝子は難しいな。

おつとせい…

違った！

母に頭を軽くさげ、奥の部屋に入る。

ゆりの彼氏と紹介されるのであろう友達が座っている。

うん。無理。

決断は早かった。

なりきれてない不良なんだもん。

ちょいでぶだし。

でもまあさすがにいきなりは失礼だし
今はまだ黙っておこう！

それから軽く飲んで
なんてない話して
ゆりと私は家をでた。

「どうだった!？」

「んー」

「無理でしょ？そーだよね。私も無理だもんね。ごめんね!」

おい!!!

なんのために会わせたんだ!？

「明日暇？」

そしてまたいきなり話変わるんだな!？

「暇だよ」

普通に答えちゃう私。

家は反対方向だが
途中までゆりが
送ってくれるらしい。

夕方の道を二人で歩く。

「明日まさる抜きで遊ばない!？」

あ。

みんなを紹介してなかった！

今一緒に歩いてるのが

古賀 ゆり

んでゆりの彼氏が

近藤 弘也

ゆりの彼氏の友達が

原田 優

つか

カップルの邪魔しにこいと？

暇だから助かるんだけどね…。

「いいよ。」

「やったアア！！！！じゃあまた明日連絡するよー！！」

そう言つてゆりは笑顔で手を振りながら今来た道に戻って行った。

明日まさか運命の出会いを果たすとはこのときは
思いもしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4372b/>

幸せ

2010年11月27日06時48分発行